

博覧会から博物館へ 万博・民博・海洋博

うのふみお
宇野文男 福井大学教授

海洋文化館(2008年5月 撮影・久保正敏)



チエチエメニ号はミクロネシアのサタウル島を一九七五年一月二七日に出港、三〇〇〇キロの航海を経、沖縄国際海洋博覧会(七月二〇日)翌年一月一八日)会場のエキスポ港に二月二三日入港し、砂浜に展示・公開された。

その会場内で最大規模の展示ホールである海洋文化館は、政府出展の施設で、ここでは海洋文化の成り立ちとその歴史、文化の伝来と発展、民族相互の交流の姿などが展示された。展示の準備のため、博覧会開催に先立つ七三年に民族資料収集団が結成されたのである。

日本万国博覧会

じつは七〇年の大阪万博の際も、テーマ館の「太陽の塔」に展示する仮面や神像等を集めるため「日本万国博覧会世界民族資料調査収集団」が組織されたという先例がある。岡本太郎の要請により当時京都大学助教であった梅棹忠夫が中心となり、六八(六九年)に若手研究者約二〇名を世界各地に派遣、約二六〇〇点の資料を集め、半数以上がテーマ館の地下に展示された。それら資料はその後

紆余曲折を経て、民博の核となる資料として展示・収蔵されることになる。

海洋民族の資料収集

万博後の跡地利用で民博の設立構想が急浮上し、それに深くかかわりはじめた梅棹は、一方で海洋博の政府出展懇談会の委員を七二年に引き受けた。京大の研究室に作戦本部をおき、海洋地理が専門の関西学院大学教授(当時)の大島襄おおしまじょうじ二氏と相談のうえ、太平洋、インド洋各地を一五地域にわけ、大学院生を中心にした資料収集団を組織した。

その事務局を担当していたわたし自身も、七四年にはマレー半島での収集に参加した。そのメンバーのうち須藤現館長をはじめ数名が民博に籍をおくのは、のちのことである。約一四〇〇点の海洋民族資料が収集され、翌春には会場に集結、海洋文化館で展示された。

沖縄国際海洋博覧会の閉幕後

博覧会後チエチエメニ号は、七四年六月に創設された民博のオセアニア展示の目玉資料として引き取られることになり、神戸までは海上輸送、そ



民博への移送直前、海洋博会場ヨットハーバーに置かれていたチエチエメニ号

こからは道路規制のため帆やアウトリガーを解体してトレーラーに載せ、七六年三月民博に搬入された。そのころはまだ建物の建築中だったので、標本資料は万博公園南側、今は住宅展示場になっている所にあつた万博保税倉庫に保管されていた。倉庫前に仮小屋を設け、解体したまま翌年二月の開館まで仮置きされた。

一方、海洋博会場は国営沖縄記念公園として存続し、海洋文化館も公開されている。それを民博の沖縄分館として再利用するという動きはあつたものの残念ながら実現に至らなかつた。海洋文化館は三年先に再リニューアルを予定しており、その際に貴重な資料がどう生かされるか期待したい。